

# 佳作

ボタン

遠山 ようこ

幼稚園からの帰り道、女の子はボタンがとれているのに気がつきました。大好きなピンクのブラウスです。

女の子はいまた道をもどりはじめました。

けれども、どこにも見あたりません。

女の子はとほうにくれて、道ばたにしゃがみこみました。

そのとき、女の子の肩になにかがとまりました。

テントウムシでした。

「ぼくじや、ダメかな」

ボタンのかわりをしてくれるというのでした。なかなかすてきなボタンでしたが、今までくもつていた空が急にはれて太陽が顔を出すと、テントウムシはすまなそうに言いました。

「やつぱりだめだ。ぼく、おひさまを見ると

じつとしていられないんだ」

テントウムシは、女の子の指先まで歩いていき、太陽にむかってとんでいつてしまいまし

た。  
「しばらくいくと、ドングリにあいました。

「ぼくでよかつたら」

ドングリはくるくるっとまわり、すてきな帽

子をとつてぴょこんと頭をさげました。

「ありがとう」

なかなかしぶいボタンです。

けれども、ドングリはなぜだか池を見るとびこみたくなります。

そして、こまつたことに池がありました。ほーら、とびこんじやつた。

こんどは、カタツムリにあいました。

「ぼくはだいじょうぶだよ」

じまんの家をゆすりながら、いいました。

「ありがとう」

うずまきもようが、とてもおしゃれでした。女の子は大よろこびでした。

まさかと思うでしようが、急に黒雲があらわれて、大つぶの雨がおちてきました。すると、カタツムリはじつとしていられません。

目を出し、つのを出し、歌いながらどこかに行つてしましました。

「ねえ、わたしでどうかしら」

かきねごしに声をかけてきたのは、赤い木の実でした。

こんどこそだいじょうぶと思つたのに、小鳥が見つけてたべてしまいました。それを見ていたマツバボタンがすかさずいました。

「わたしはどうかしら」

名前もなんだかぴつたりで、女の子はうれしくなりました。けれども、太陽がしずむと花はしほんでしました。というわけで、市川の町で女の子はまだボタンをさがしています。